

第2回 栗東市農業振興基本計画等策定委員会 議事要旨

日 時	令和3年2月18日（木）14:00～16:00	
場 所	栗東市役所危機管理センター3階 大研修室	
出席者	【委員】	香川文庸委員（委員長）、大平倫史委員（副委員長）、武村秀夫委員、谷口敏彦委員、中井栄夫委員、猪飼正道委員、竹村明委員、三浦喜彦委員、林優里委員
	【オブザーバー】	滋賀県大津・南部農業農村振興事務所
	【事務局】	栗東市環境経済部農林課 株式会社パスコ
欠席者	【委員】	田中利志次委員、小林義康委員、中井あけみ委員
次 第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. あいさつ 3. 報告事項 <ol style="list-style-type: none"> (1) 市民アンケートの結果について (2) 農業従事者アンケートの結果について (3) 中学生アンケートの結果について (4) 事業者ヒアリングの結果について 4. 協議事項 <ol style="list-style-type: none"> (1) 栗東市農業振興基本計画の骨子（案）について (2) 栗東市農業振興基本計画目次構成（案）について 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> (1) 次回の会議日程について (2) 連絡事項 6. 閉会 	

1. 開会

2. あいさつ

- ・香川委員長によるあいさつを行った。
- ・西村部長によるあいさつを行った。

3. 報告事項

- (1) 市民アンケートの結果について
- (2) 農業従事者アンケートの結果について
- (3) 中学生アンケートの結果について
- (4) 事業者ヒアリングの結果について
 - ・事務局より資料の説明を行った。

4. 協議事項

(1) 栗東市農業振興基本計画の骨子（案）について

(2) 栗東市農業振興基本計画目次構成（案）について

- ・事務局より資料説明を行い、本計画の骨子（案）並びに計画目次構成（案）に関する委員の意見を頂戴した。
- ・以下、主な意見。

■栗東市農業振興基本計画について

(計画の目指す方向)

副委員長：「栗東市の100年先を見据え、人と農業、農地が調和し、豊かな暮らしを享受できる農業を通じた持続可能な社会の実現」ということで、これを目指して、この計画が立てられるということを皆で共有していくということ。

委員長：10年後、20年後の栗東市の農業はどういう姿になっていけばよいか。一方で、今のままであれば実際問題として10年後、20年後はどうなっているか、そのギャップをいかに小さくするかを、この基本計画で考えていくべき。

委員長：2030年までの基本計画としてのグランドデザインとともに、例えば2～3年区切りでのアクションプランを組み込めば具体的になる。

(各主体との連携のあり方)

委員：農業従事者の困っていることは、農業従事者さんたちで解決できることなのか。行政の手を借りないといけないのか。それに加えて、市民がやれることと、行政ができることを区別すると良いのではないか。

委員：この計画で議論している内容は、農業者は今まで誰も知らない話である。栗東の農業はこんな形にしたい、みんな頑張りましょう、と農家と行政が一体となって頑張るべきものだと思うので、どこかの場面で農家へのアピールや農家に配るなどして周知して頂きたい。

副委員長：農業を取り巻く環境として問題点が多すぎると思っている。行政や農協、農業委員、これらが上手にかみ合っていない。計画として何をメインに取り組むか、1個に絞ってはどうか。せつかく皆さんに貴重な時間に集まっていただいて、会議をしていただけるので、メインのところを1つ決め、みんなでこれだけはやろうと決めた計画になればと感じている。

(その他修正等)

委員：計画書骨子（案）について、「軟弱野菜に適した土地」との表現は誤解を招く。農地を取り巻く社会潮流に「オーガニック」を入れて頂きたい。また、「Society5.0」、「AI」、「IoT」などの日本語説明を記載して頂きたい。

■担い手問題について

(多様な主体や地域が一体となった支援組織、体制の整備)

委員：農地面積が約 560ha の中で、認定農業者が 20 数名しかいない。上砥山営農組合では現在、組合員は 94 名いるが 10 年後は 40~50 名程度となり、空き家も増える可能性がある。また、高齢者雇用安定法により 70 歳までの雇用が努力義務となり、定年後の人材の確保が難しくなる。支援・育成との文言があるが、支援組織が無く、どこに相談に行けばよいか分からない。JA、行政、商工会等が一体となった支援組織をつくってはどうか。

委員長：地域が一体となった支援組織が必要。地域と一体となった支援組織ができると、その組織が地域の農地をどう活用するかについての計画を立てていけるポジションになっていく。しかし、実際に現場で農業をされている方々は、組織の計画の中で農業を行っていくことをよしとするかどうか。単に農家に対して支援をするだけではなく、地域の農業の意思決定を任せられるかどうかがかぎになってくると考えられる。

(農業経営の組織化、法人化と集約)

委員：これからは従業員のことも考えて、法人化をしていかなければならない。営農法人に就職という形で就農してもらえる。他産業に就職するのと同じようなレベルで、確保していかなければならない。そのための人探しや採用のバックアップをしていただきたい。

委員長：米に過度に依存しない農業に切り替えていく必要があり、少数の担い手が農地を使うような方向も考えざるを得ない。そうになると、農家個人、個を越える農業を考えないといけないのではないか。

委員長：個別の農家でみると、小さな農家に後継者がいなくて困っているという感じになるが、地域全体で見ると後継者がいないわけではない。数少なく存在している後継者が、面積を拡大して農業でバリバリやっていくための条件が整っていないのが今の状態。そういう人たちに、どう農地を集め、生産する条件を整えていくか。栗東市の中で頑張っている、担い手と呼ばれる少数の人たち・少数の組織・経営体や農家なりを、非農家の方々が温かい目で見守っていく。そういう仕組みができれば好循環が生まれてくるのではないか。

(次代の担い手の確保)

委員長：スマート農業を取り入れながら、農業が子どもたちのあこがれの職業になるような工夫も、行政と一体になりながら進めていく必要があるのではないか。

委員：将来、担い手不足は間違いないと思う。ロボットを使った農業、AI や機械を使った農業を始めている地域もある中で、中学生が持つ農業のイメージは退屈で原始的なままである。機械化している姿、AI と農業が融合している姿を見せてほしい。それにはお金もかかるので、行政のバックアップがあればよいのではないか。

委員長：中学生アンケートでも「農業があこがれの職業になっていない」という結果が出ている。これは日本全国どこでもそうである。しかし、アメリカでは農業は高度なスキルが無いとできないあこがれの職業となっている。実際に、農業者になってもらうためには、高等教育で、農業高校や大学の農学部に進学してもらうのが最も手っ取り早く、そのため

には初等教育のあり方がとても大切という研究結果が出ている。滋賀県は全国的に見て、農業体験学習を積極的に行っているが、まだまだ改善の余地がある。工夫次第で小学生、中学生が農業に興味を持って、高等教育で農業関係の学校に進学して農業者になるという道は残されていると思っているので、そういうところも、今後の計画の1つに入れていただければと思う。

■栗東市の農業振興の方向性

(都市近郊型の農業)

委員：栗東市をベースに農業をやっていくには、東北などの大きい産地と戦うのではなくて、都市近郊型の農業のあり方というものを考えるべきではないか。

(農地の環境整備、集約化等)

委員：兼業農家さんはできれば農業をやめたいという考えの方も多く、私のところにも毎年ものすごい量の田んぼが集まってくる。経営としては増やしたいが、インフラが整備されておらず、農道や水路が悪いため、使える田んぼの面積があまりにも少ない。大きな圃場整備、土地改良をしている地域もあるが、今後は難しいのではないかと思う。地権者が変わっても、農地を集積、大規模化することで効率が良くなるのではないか。

委員：根本的な部分でいうと栗東市の場合は農地が課題。とにかく農業がやりにくい農地で、水はけなど、農作物が育ちやすい環境の農地を整備すれば、栗東でも定着して農業をする人が出てくると思う。

委員：水はけのよい地域に野菜農家ばかりを集めて団地を作るのはどうか。地権者のこともあるが、農地を流動化させて集約していく施策、農協と市が連携して取り組んではどうか。

委員：空き家が増えている中で、家を売るときに、できれば農地もひっくるめて売れるような仕組みはできないか。難しいかもしれないが、ネットで情報発信するなどできないか。

(ゾーニングによる地域の特性を活かした農業振興)

委員：栗東市は人口が増えており、住宅地の中で農作業をするのは、クレームもあり、作業効率も悪くなる。極端なことをいうと、そういったところは宅地にすればよいと思う。その中で、地域を区分けして、ここは農地として生産性を高めるという形でブロック分け、線引きをしていってはどうか。

委員：地域住民が、自分の住む地域が今後どのように進んでいくのかを理解していないように感じる。栗東市は地域の色が強いので、農業だけではなく、そこでの暮らしなどすべてに関連するところで地域の方向性を考えていくべきだと思う。

委員長：地域全体の農地利用計画をどうするのかに行き着くように思う。つまり、ゾーニングを徹底的に行う必要がある。農地として使う農地はいったい誰が使うのか。どのように使うのか。条件が悪い農地は改良しなくてはならない。そういうことを個別に任せるのではなくて、市が一体となり、栗東市の農地利用計画をエリアでつくる必要があるのではないか。

(農産物の開発、PR)

- 委員：栗東市は米の安定的な生産ができているが、栗東市での消費比率は非常に少ないと思う。栗東市も滋賀県も琵琶湖があるから日本一安全なお米を生産している。それをもっとPRしていかなければならないのではないかな。
- 委員：今の特産はイチジクとお米である。栗東でしかできない、全国的にアピールできる特産品が10年後にできればよい。例えば、一部でもいいので、これはおいしいとなって全国に広がる。そういう農業ができるとよいと思う。
- 委員長：イチジクはジャムが非常においしくて、いろんな地域から提供してほしいと言われるが、農家の数が少ないから追いつかなくて困っていると言っておられた。そういうところも1つの切り口になってくるのではないかな。
- 委員：道の駅や直売所は委託販売のため、売れ残ったものは廃棄されてしまい、採算が合わない状態となっている。栗東市内の道の駅や直売所でも明日までもたないものは、その日のうちに加工する。また、フードバンクや子どもレストランに寄付する等でフードロス対策に取り組むと同時に、生産者にも還元されるようなシステムを考えて頂きたい。

(市民等との交流)

- 委員：市街地内の農地については、アンケート結果にもあるように地域の方々と接するイベントや家庭菜園や貸農園にしてはどうか。地権者個人で貸すのではなく市が間に入り、三セク等が管理をするようにして、市民に農業の良さと農作物づくりの大変さ、食育など、そういう活動ができるように活用してもらいたい。
- 委員長：都市住民等のアンケート調査をすると、多くは農業に理解は示すものの、実際にはそうではないのが実態。本当の意味で農業をしている人間と非農家の人間との関係性をつかんでいくためには、どんな方策があるか考える必要がある。

5. その他

- (1) 次回の会議日程について
- (2) 連絡事項

- ・事務局より次回の策定委員会の予定について説明を行った。
- ・事務局より年度変わりのため委員を退任、変更する場合についての説明を行った。
- ・大平副委員長より異動のため退任するとのこと報告を頂いた。

6. 閉会